『野菊の墓』

伊藤左千夫

民子の美しい手で持ってると銀杏の葉もことにきれいに見える。二人は坂を降りてようやく窮屈な場所から広場へ出た気になった。今日は大いそぎで綿を採り片づけ、さんざんおもしろいことをして遊ぼうなどと相談しながら歩く。道のまん中は乾(かわ)いているが、両側の田についている所は、露にしとしとにぬれて、いろいろの草が花を開いてる。タウコギは末枯(うらが)れて、水蕎麦蓼(みずそばたで)など一番多く茂っている。都草も黄色く花が見える。野菊がよろよろと咲いている。民さんこれ野菊がと僕はわれ知らず足を留めたけれど、民子は聞こえないのかさっさと先へゆく。僕はちょっとわきへ物を置いて、野菊の花を一握り採った。

民子は一町ほど先へ行ってから、気がついて振り返るや否や、あれッと叫んで駆け戻(もど)ってきた。

「民さんはそんなに戻ってきないッたって僕が行くものを……」

「まア政夫さんは何をしていたの。わたしびッくりして……まアきれいな野菊、政夫さん、わたしに半分おくれッたら、わたしほんとうに野菊が好き」

「僕はもとから野菊がだい好き。民さんも野菊が好き……」

「わたしなんでも野菊の生まれ返りよ。野菊の花を見ると身ぶるいの出るほど好(この)もしいの。どうしてこんなかと、自分でも思うくらい」

「民さんはそんなに野菊が好き……道理でどうやら民さんは野菊のような人だ」

民子は分けてやった半分の野菊を顔に押しあててうれしがった。二人は歩きだす。

「政夫さん……わたし野菊のようだってどうしてですか」

「さアどうしてということはないけど、民さんは何がなし野菊のような風(ふう)だからさ」

「それで政夫さんは野菊が好きだって……」

「僕大好きさ」

民子はこれからはあなたが先になってと言いながら、自らは後(あと)になった。今の偶然に起こった簡単な問答は、お互いの胸に強く有意味に感じた。民子もそう思った事はそのそぶりでわかる。ここまで話が迫ると、もうその先を言い出すことはできない。話はちょっと途切れてしまった。